【論文】

モノと女性のスピリチュアリティ
――布ナプキンの事例から

橋　迫　瑞　穂[†]

1．はじめに

本稿で検討する「布ナプキン」とは、木綿、あるいは絹製の生理用品のことを指す。布ナプキンは紙製のナプキンと異なり、洗濯することでくりかえし使用できるものの、その分利便性が低い。そんな布ナプキンが最近になって注目されるようになったのは、それが「子宮」をケアするだけでなく、健康や美の向上、そして、心の健康にも資するものとして捉えられているからである。そしてそれだけでなく、布ナプキンを通して、「子宮」に神聖な意味や価値づけを行う動向もうかがわれる。実際、「スピリチュアル」なイベントとして有名な、「癒しフェア」やアースデイといったイベントで布ナプキンが販売されたりしているのは、そのことと無関係ではない。布ナプキンについては、関連書籍が書店に置かれたり、ウェブで紹介されたりもしている[1)]。

このように布ナプキンが広まった背景には、「スピリチュアル市場」の動向が影響している。精神や霊性を意味する「スピリチュアル」（spiritual）は、欧米におけるニューエイジ運動や文化におけるNot religion, but spiritualという言葉に示されるように、組織によらない「宗教的なもの」の現れを示す。近年では、こうした組織によらない宗教的な動向を、研究者が分析、検討する際に、スピリチュアリティ（spirituality）という概念が使用されるようになった。例えば宗教学者の島薗進は、スピリチュアリティを「個々人が聖なるものを経験したり、聖なるものとの関りを生きたりすること、また人間のそのような働きを指す」と定義している[2)]。

一方で、スピリチュアリティは消費社会との親和性が高く、スピリチュアルな情報やモノを取引きする一種の市場を作り上げられている。アメリカでは、市場を通してやりとりされているスピリチュアルな商品が、既成の宗教を凌駕する可能性すら議論されてきた[3)]。日本でも、2000年代に入って「スピリチュアル・カウンセラー」を名乗る江原啓之の登場をきっかけに、「スピリチュアル・ブーム」が到来すると、ヨガやパワースポット、アロマ、前世、ヒーリング、占いといったスピリチュアルなモノや情報がやりとりされる市場が形成され、女性を中心に多くの人びとを集めている。市場の具体例として、先述した「癒しフェア」や書籍、ネットなどが挙げられる。最近はブームもひと段落したが、スピリチュアルな商品がやりとりされる状況が社会から消滅したわけではない[4)]。そして、その「スピリチュアル市場」のなかで注目されるようになったのが、布ナプキンである。

では、今日、布ナプキンが注目されるようになったのはなぜなのか、そしてそのことに「スピリチュアル市場」が深く関わっているという事態は何を意味するのか。本稿ではこのような問題意識に立って、布ナプキンというモノに注目し、それがどのように広まっているのかを検討すること

† 立教大学社会学部兼任講師
mizuhohashisako@gmail.com

で、現代日本社会における女性の身体観とスピリチュアリティとの関係を明らかにしようとするものである[5)]。

具体的な内容に入る前に、これまで月経や生理用品がどのように論じられてきたのかを整理しておきたい。民俗学や文化人類学では、伝統的な共同体が月経を「ケガレ」と見なし、祓い清める対象としてきた歴史が明らかにされてきた。「ケガレ」とは、「死」や「病人」から発生して、地域共同体を脅かし、汚染する害悪のことを指すが、月経も忌むべき「ケガレ」と見なされたもので、できるだけ共同体の中心から遠ざけられてきた。月経中の女性が「ケガレ」た存在と見なされてきた例として、「赤不浄」の考えが挙げられる。さらに、伝統社会のなかには、月経中の女性を共同体の生活圏から隔離して生活させる「忌屋」「月経小屋」を設ける慣習なども存在していた。そこでは、月経の処理に使い古しの布や綿、古紙などが用いられたりした。また、月経中には口にしてはいけないものが決められたり、火にまつわるタブーなども存在したりしていたことが知られている（瀬川 1980; 成清 2003）。

「ケガレ」という概念を用いて、月経と出産に大きく切りこんで論じたのが、文化人類学者の波平恵美子である。波平は、月経や出産が忌むべき対象とされたのは、それらが生と死の境界線上に位置するため、「ケガレ」を呼び込むものととらえられたからであると論じている。そして、月経や出産を「ケガレ」と見なす伝統的共同体の仕組みについて、「男性と女性の生理的相違を、社会的・文化的相違にまで引き上げ、しかも、その対立相違する男女の対応関係、相互依存の関係を制度的に表現」（波平 84: 222）したものであると述べている。

明治期に入ってゴム製の生理用品が登場し、普及しはじめるようになると、月経は徐々にトイレで処理する個人的なものへと変化していった。そして、1961 年に紙製のナプキンが登場すると、女性のあいだで一般的な生理用品として普及するようになったのである（小野 2000; 川村 1994;田中 2013）。紙製ナプキンの登場と広まりについて、天野正子と桜井厚は、生理用品の発展の背景に女性の社会進出があったことを指摘した上で、「女性たちが積極的に自分の生き方をみつけはじめる動きと、自分にあった生理用品を求め使おうとする動きとは、みごとに関連しあっていた」（天野・桜井 1992）と述べている。

このような、月経の個人化とも言うべき変化は、フェミニズムの潮流とも影響しあっている。1994 年にエジプトのカイロで行われた国際人口開発会議で採択された「リプロダクティブヘルス＆ライツ」は、妊娠、出産という選択を女性が自分自身で決めるという内容のものであり、日本だけでなく世界の女性にとっての妊娠、出産、そしてそれらに連なる月経のあり方に大きな影響を与えたのである[6)]。

以上のように、月経は妊娠、出産を司る機能を有しているため、かつては宗教的な文脈に組み込まれ、制度的に管理される対象であった。伝統的な女性差別は、月経をケガレと見なすことでさらに制度的、政治的な管理によって再生産されてきたと言える。他方で近代に入り、月経は女性にとって個人的なものへと変化していった。それでも、ようやく月経が気軽に処理できるようになったのは、紙ナプキンが広まった 60 年代に入ってからのことである。言い換えれば、生理用品の発展と普及によって、月経の個人化、私事化が進んでいったのである。したがって、ナプキンの歴史から見ると、月経は宗教的な文脈から離脱するという、いわば「世俗化」が進んできたといってよいだろう[7)]。

しかし現在でも、女性たちは月経そのものから完全に自由になったわけではない。また、月経をケガレと見なした伝統的共同体と異なる位置に、女性たちがたどりつけているわけでもない。言うまでもなく月経とは、単に出血するだけの生理現象ではないからである。生理周期のなかで頭痛やむくみ、精神的な不安定さなどのPMS（月経前

症候群）が少なからず誘発される。月経はまた、妊娠、出産を司る子宮の状態を知るためのバロメーターでもある。女性たちは仕事やキャリアを維持したり、生活を回したりするなかで、こうした月経のあり様と、さらには子宮を含む体の変化とに向き合わなくてはならない。

そうしたなか、「スピリチュアル市場」において、月経に特別な意味を見出したり、子宮に神聖な意味づけをしたりする布ナプキンが登場して、人気を集めたのは興味深い事象と言えるだろう[8)]。述べたように、布製のナプキンは紙製のナプキンよりも手間がかかる上に、万人に快適なモノであるわけでもない。では、布ナプキンが「スピリチュアル市場」で注目されるようになったのは何故なのだろうか。そして、布ナプキンの広がりという状況を通して女性とスピリチュアリティとのどのような関係が見いだされるだろうか。

この点を明らかにするため、本稿では二つの観点から「布ナプキン」について検討する。一つ目は、「布ナプキン」の使い方や長所を説明する書籍を検討することである。二つ目は、「布ナプキン」の広がりに大きな影響を与えた、疫学者である三砂ちづるの考えを検討することである。

2. 布ナプキンの概要

布ナプキンについて具体的な内容を検討するために、国立国会図書館の検索サービス（NDL ONLINE）で検索した3冊に加えて、フィールドワークの最中に入手した2冊の本を取り上げる。5冊という数は、分析するには十分とは言えないだろう。だが、布ナプキンは、月経や子宮に関わる健康を扱った書籍でも広く取り上げられており、その影響の範囲は大きい、その例として「子宮」と表題に含む書籍のなかで、布ナプキンについて紹介した書籍も取り上げる。

まず、書籍から布ナプキンの概要について整理する。布ナプキンを扱った図書で強調されるのは、布ナプキンの素材や、手にした時の質感の良さである。例えば、布ナプキンの専門家である山浦麻子は『布ナプキンはじめてBook生理をここちよく』（山浦 2012）で、以下のように述べている。

> 私にとって気持ちよく過ごすことできる生理用品が布ナプキンでした。布でできたナプキンがあると知り、初めて布ナプキンを手にしたときのことは今でも本当に忘れることができません。ふんわりとしていて手にしただけで温かみを感じ、繊維ひとつひとつがふっくらと起毛した布ナプキン。初めて手にとったときに込み上げてきた感情は、驚きと喜びでした。「汚れるとわかっているものにこんないい布を使ってしまうなんて」という驚き。シンプルだけどいい素材の服を買ったときの、少しだけ贅沢をしたようなうれしさ。ごく自然に「早く使ってみたい」と思い、生理を待ち望むような気持ちにさえなりました（山浦 2012: 86-87）

山浦はさらに、家にある古い布やお気に入りの布でナプキンを「ちくちく手づくり」することを推奨している。その際、「子供のころにフェルトでマスコットをつくって遊びませんでしたか? 手縫いの布ナプキンも手芸遊びのようなものです」とも述べている。そして、布ナプキンを思い出の服から切り取った布地で作ったり、可愛らしくデコレーションしたりする方法などを紹介しているのである。

他方で、布ナプキンの手引きでは、オーガニックの綿を用いた布ナプキンが勧められている。なかには、徹底的に素材にこだわって、元の布地から作る過程を紹介した本もある。オーガニックの綿が推奨される理由については、後述する。

さらに、布ナプキンの形状や種類についても紹介されている。ひとくちに布ナプキンと言っても、紙ナプキンと同様に経血の量や、昼や夜との生活スタイルの違いにあわせて、その形状や使い方などには多様なものがある。また、布ナプキンは吸

水性ポリマーを使用した紙製のナプキンと異なり、吸水性が十分ではなく、撥水性も少ない。そのため布ナプキンの紹介本では、月経の漏れを防いだり、外出先でも使うためのポイントやコツなどが解説されているのである。

本では、布ナプキンの洗濯のし方についても、詳しく説明されている。ほとんどの書籍では、布ナプキンは手洗いすることを推奨している。具体的には、ホーローのバケツを使用して、炭酸ナトリウムを主とした天然洗剤につけこみ、時間を置いてゆすぎ洗いする手順が紹介されているのである。書籍によっては、布ナプキンの洗濯に使った水を植物に撒くことを推奨している。その理由として、月経が汚物ではなく価値があることや、月経も自然の一部であるというエコロジーの意識が強調されている。例えば、造形作家で布ナプキンの専門家でもある角張光子は『ひろがれひろがれエコ・ナプキン』（角張 2005）のなかで、以下のように述べている。

> 布製のナプキンを使用すると、使って洗った時の自分の中に起こる変化が、確実な手応えとなって返ってきます。
>
> 自身の経血の色で体調や食とのつながりが見えてきたり、この滋養を含んだ鮮血液を植物の根元にかけてあげると、その瞬間に女性の体が大地と一体につながっているという幸せな気分がわき起こってきたり……、と自分の生理がいとおしくさえ思えてくるのです。さらに自分で洗って干すことの気持ちよさを味わい、来月の生理が楽しみにさえなってきます（角張 2005: 13-14）。

さらに、布ナプキンを洗濯する行為が、例えば次のように、「母性」への気づきの過程として設定されていることも特徴として挙げられる。例えば、ヨガインストラクターの仁平美香は『魔法のヨガ＆布ナプキン』（仁平 2012）で以下のように紹介している。

> 母性的な気持ちを取り戻せる
>
> 昔なら、近所にたくさん子供たちが走り回っていて、子供たちと触れ合える場所や時間がたくさんありました。いまでは、そういう機会も減り、バリバリ働いていると母性を忘れがちに……。それでも、布ナプキンを手洗いしていると「いつかお母さんになるんだな」と母性を取り戻し、おおらかな気持ちが生まれます（仁平 2005: 35）。

布ナプキンを洗濯したり、干したりするいとなみが、自分の子どもたちに対する性教育にもなるという考えもある。自然やエコに関心が高く、関連する書籍や商品を販売している会社である「クレヨンハウス」が発行しているマガジン『いいね㉕いいこといっぱい布ナプキン』（クレヨンハウス編 2016）では、月経が始まった自分の娘に対して、布ナプキンを使わせる方法などを紹介する記事も掲載されているのである（クレヨンハウス編 2016：22-25）。

述べたように、布ナプキンは紙製のナプキンより不便な点が多い。だが書籍からは、布ナプキンをめぐっては、手間がかかることそれ自体が重視されていることがうかがわれる。すなわち、手間をかけることで、自身の月経や子宮の状態を確かめたり、ケアするだけでなく、社会や自然とのつながりが見えてくるというわけである。そして布ナプキンにかかる手間が、自らの内面に「母性」を育くむ過程としてとらえられていることも目につくところである。

以上は、布ナプキンを用いる方法や手間についての概要であるが、他方で、布ナプキンの使用が身体的健康に及ぼす効果についても、さまざまな言説が展開されている。次にその点について見てみよう。

3. 布ナプキンの「効果」

布ナプキンの身体的健康に及ぼす効果として強調されるのが、「冷え」を取るという役割である。「冷え」というのは、血流が停滞して血行が悪くなり、体が「冷え」てしまうことをさすが、この考えは東洋医学に基づいて展開されてきた。布ナプキンを使えば、この「冷え」を改善するのに効果的だという主張がなされるのである。例えば、先に取り上げた仁平の著作では、「布ナプキンを初めて使うとき、まず最初に『ほっと包まれるような温かさ』を感じます。体温が下がりやすい生理中の強い味方になってくれるというわけです」（仁平 2005: 5）と記されている。

さらに、布ナプキンの「温める」という効果は、紙ナプキンとの対比でより強調されることが多い。先述したクレヨンハウスのマガジンでは、オーガニックコットンの会社のマネージャーで、布ナプキンの専門家である前田けいこが、紙製のナプキンの欠点について述べている。前田は、紙製のナプキンは実質的に石油製品であり、特に経血を吸収する高分子吸水ポリマーは水分を閉じ込める保冷剤と同じ効果を持っていると主張する。そのため、紙製のナプキンは子宮から「冷え」をもたらし、かぶれなど肌トラブルを引き起こすともあると主張する[9]。

布ナプキンとの対比で批判の対象とされる紙製のナプキンをめぐって、子宮の健康を損なうとする論調もある。すなわち、紙製ナプキンはダイオキシンを含んでいて、それが子宮に吸収されることで、経血過多や子宮内膜症の原因になるという主張がされることもある。こうした主張には、「経皮毒」という考えが影響を与えている。さらに、紙ナプキンはゴミとして焼却されることでダイオキシンを発生させるので、環境汚染の一因にもなるという主張も見られる。布ナプキンにオーガニックコットンを使うことが推奨されるのは、子宮に有害なものを吸収させないためという理由からなのである[10]。

布ナプキンを取り上げる書籍には、以上の他にも、「冷え」を取る生活改善のための方法がさまざまに紹介されている。例えば、クレヨンハウスの本では、料理研究家のコウ静子による、月経前のゆううつや、月経期間の貧血といったものを改善するための薬膳をベースにした料理のレシピが紹介されている。薬膳とは、東洋医学の「気」の考え方を基礎としたもので、食べ物で気のめぐりを改善することによって、気力の充実や体質の改善が図られると考えられている。月経にあわせて「気」を改善するには、月経前にローズやミントを使ったハーブティーを飲み、月経中は鶏肉でダシをとったおかゆを食べることが「気」を充実させるのにぴったりだといった具合に取り上げられている。

さらに、「冷え」をとるための生活習慣の見直しとか、「温め」るためにコットンの靴下を履いたり、締め付けのきつい下着を避けたり、腹巻やカイロを使ったりといったようなことが説かれたり、また、内面から明るくなることが、「冷え」を追い出すことにつながると説かれたりもしている。要するに布ナプキンに切り替えることで、生活習慣を根本から見直すことが推奨されているのである。

このように「冷え」をとることは、子宮の状態を良くするのに効果的だと考えられている。例えば、仁平美香は以下のように述べている。

> 子宮という器官は、妊娠・出産はもちろん、女性のココロとカラダの健康、そして美しさを語るうえでも欠かせない存在。ところが子宮がカチコチに固まった状態だと、周辺に張りめぐらされた血管が圧迫されて血流が悪化し、子宮をはじめとする内臓の働きが低下してしまうのです。子宮の機能が低下すると、女性ホルモンや自律神経のバランスを乱し、イライラや過食、肌荒れや肥満など、さまざまな不調の悪循環に。それだけでなく、婦人科系の病気などの深刻なトラブルにもつなが

> りかねません。つまり女性の多くがかかえるお悩みを解決するには、こり固まった子宮をゆるめ、しなやかな状態に整える――そんな「子宮美人」になることが近道なのです。（仁平 2005: 10-11）

「冷え」を取るために布ナプキンとあわせて紹介されているもので、最も典型的なのがヨガである。月経のタイミングにあわせてヨガを行うことで、骨盤がゆるんで血行が良くなり、生理痛が緩和すると説かれている。書籍のなかには、月経の前、後、さらには最中に効果のあるヨガのポーズを紹介したものも多い。他方で、マッサージも推奨されている。例えば、タイのマッサージであるチネイザンで子宮にアプローチするなかで、布ナプキンを推奨するセラピストの井上清子も『おひさま子宮のまほう―― 体の中心から免疫力を高め、女性の不調を癒す』（井上 2016）で以下のように述べている。

> 子宮は人の顔のように、たくさんの「表情」を持っています。温度、やわらかさ、潤いや締まり……同じ人であっても、そのときの心や体の状態によって膣や会陰の様子は違うから神秘的です。心身ともに健やかな人の子宮は、生命力に溢れています。女性器は美しいピンク色に輝き、まるでもぎたての果実のようにプルプルで“ジューシー”（略）一方、病気や不調、緊張、心配ごとなど抱えている人は、子宮もなんだか元気がありません。ちょっぴり悪い言い方をしてしまうと、干からびた“干し柿”というイメージでしょうか（井上 2016: 45）。

このように、布ナプキンを使って子宮をケアし、「冷え」を防ぐことで子宮が温まるだけでなく、内面も変化することが主張されている。そしてその結果、女性に特有の不調を乗り越えて、豊かな内面性が育まれることが強調されているのである。さらには、これらの効果によって女性らしい魅力が高まるので、夫婦のセックスレスが解消し、子どもができたという読者の体験談も寄せられている。ただし、ここでいう子宮はあくまで、体の外からイメージされるものとしての子宮であり、科学的、医学的な見地から見る臓器としての子宮そのものではないことに注意したい。

4.「昔の女性」の称揚

ところで、布ナプキンの本では、盛んに「昔の女性」が称揚されるという傾向が見られる。その典型的な例が、「昔の女性」は「月経コントロール」ができていたという主張である。仁平美香は、「昔の女性は生理のときには経血を子宮のなかにためておき、トイレに行くときに腹圧をかけて出していた」から、月経が早く終わり、布ナプキンに排出する量が少なくて済んでいたと主張する。現代の女性は子宮がこり固まっているのでそれができないが、しなやかな子宮にすることで、「月経コントロール」が可能になると述べている。そのための具体的な方法として、性器の周辺である会陰の筋肉を鍛えたり、布ナプキンを使って経血を排泄するタイミングを見定めることが紹介されている。さらにトイレで経血を排出するには、自分の月経や子宮に対して高く関心を持ち、内面化するという「気づき」も必要であると主張している。

布ナプキンを扱った書籍には、伝統社会における月経のあり方を肯定的にとらえようとする意見も見られる。例えば、すでにふれたように、伝統社会で月経の最中に女性が過ごさねばならなかった月経小屋は、村落共同体の境界領域に建てられることで、「ケガレ」を避けるための役割を担っていた。すなわち月経小屋への隔離とは、女性差別的であったと言えるだろう。だが、この風習について肯定的にとらえる意見が掲載されたりしている。

> 生理が理由で家族と別居・・・・・・。現在の私たちからは想像もできないことですが、その昔、槻屋ごもりという風習がありました。（中略）ちょうど同じ頃に生理になり、こもるために同じ場所につどった顔見知りの女性が複数いたとしたらどうでしょうか。そこでは女性同士ならではのおしゃべりが自由にでき男性の目や耳を気にせずに盛り上がって、日頃の息抜きの場となっていたかもしれません。“こもること”は意外と楽しい面があったのかもしれないと思いませんか？（山浦 2012: 74-76）

このように、布ナプキンの本では「昔の女性」が称揚されるなかで、月経による共同体からの隔離すらも肯定的にとらえられているのである。

ここまで、布ナプキンを扱ったガイドブックから、布ナプキンの使い方やその目的、価値観などについて検討してきた。他方で、このように布ナプキンが広まった要因の一つとして、特に大きな影響力をもったと考えられるのが、ベストセラーとなった三砂ちづるの著作『オニババ化する女たち――女性の身体性を取り戻す』（三砂 2004）である。三砂の著作が布ナプキンの人気に直結したとは断言できないが、例えば先述した仁平の著作には、三砂の文章がたびたび引用されているなど、三砂による月経への考え方や姿勢が、布ナプキンの本に影響を与えている箇所が散見される。また、三砂の著作は月経の位置づけと、子宮の神聖化とを結びつける、モデルとも言うべき記述が見いだされる。そこで、月経や子宮を神聖視することと、布ナプキンの人気との関係について考察するために、以下では、三砂の著作について検討したい。

4. 三砂ちづると月経観

三砂ちづるによる『オニババ化する女たち――女性の身体性を取り戻す』（三砂 2004）はベストセラーになり、大きな反響を呼んだ。同書の冒頭で三砂は、「女性のからだの声が忘れ去られている」（三砂 2004: 18）と主張して、その根拠に子宮の病気の増加や月経のトラブル、そして若者が子どもを産みたくないと考えるようになったということを挙げている。さらに、月経や出産、性を通して得られる「『受けとめる存在』であった母親像」が崩れてきたと述べている（三砂 2004: 30）。その背景には、行き過ぎた医療管理や、医療の知識に基づく女性の体への干渉があると言い、「からだの声を聞く態度や方法」を取り戻すことが必要だと論じている。

さらに三砂はまた、出産についても言及し、出産による痛みや会陰切開への恐怖から、出産は痛いというイメージを持つ女性が増えていると主張する。そしてそれは、病院で医者が取り上げやすいように、仰臥位で産むことが通例になったからだと指摘する。その上で三砂は、日本には助産院という場所が残っていて、そこでは「自然なお産」ができる環境が整っていると述べている。「自然なお産」とは、「まったく医療介入をしないで、女性が自分のからだに向き合って赤ちゃんを産んで、自分のからだをしっかり」感じられる出産だと三砂は言う（三砂 2004: 101）。そして「自然なお産」は、痛みも良い経験であったととらえられるだけでなく、次のように述べている。

> このような、「しっかりとからだに向き合ったお産」のときに感じる宇宙とつながったような経験を、私は「原身体経験」と言っています。人間の根っこになるような経験です。自分は一人ではなくて、誰かとつながっている、また、自然、宇宙ともつながっていて、つながっているところから力が出てくる、そういう経験です（三砂 2004: 103）

こうしたお産に臨むことで、女性は母親として、また女性としての身体に向き合うことができると主張するのである。他方で、結婚をせずに仕事に打ち込む女性像が社会に浸透するなかで、「宇宙

を感じる」ような「霊的な体験」であるはずの性生活が失われていると三砂は述べている。その上で、「子宮をつかう」体験が日常にないと女性はヒステリックになってしまい、「オニババ化」するというのが三砂の主張である。さらに、「スピリチュアル」なことが流行っていることに触れて、三砂は次のように述べている。

> スピリチュアルなこととからだのことというのは、本当に表裏一体なのです。スピリチュアルなことが裏にあるので、からだにそれが出てくる。というのも、本当は人間は誰かとつながることによって、もう一度自分が自然とつながっていたという経験を取り戻しながら生きていって、次の世代を産むようにできているのに、それができていないから、からだの上でやはりトラブルが起きるわけです（三砂 2004: 148）。

以上のように論ずる三砂は、イヴァン・イリイチの「ヴァナキュラー」論を取り上げ、「土着の男と女のありよう」が産業社会によって失われたと主張する。このような主張の背景には、日本の宗教性を象徴する神社が「女性性の象徴」であり、クリトリスが鳥居で、「参道が産道、お宮が子宮」だとする思想が横たわっている。

他方で、フェミニズムの思想に対して批判的であることも、三砂の思想の一つの特徴であると言えるだろう。そのことは、自身の仕事の関りからリプロダクティブヘルスを重視し、フェミニズムが「産んでも産まなくてもあるがままの私を求めてほしい」という風通しの良さをもたらしたことを評価しながらも、「『女としてのからだを大切にしない』という大きな落とし穴」を作ってしまったと述べていることに示されている。三砂は、フェミニズムによって「女性の性と生殖に関わるエネルギー」が行き場を失ったととらえるのである[11]。

三砂はまた、「月経コントロール」や、「月経コントロール」ができるための体づくりを重視する。そうした三砂にとって、最近の女性は骨盤底筋が緩んでしまったために、「月経コントロール」ができなくなっていることが問題とされるのである。その主張こそ、布ナプキンの人気に大きく影響を与えた。

なぜなら三砂によると、高齢者世代の女性は、月経の手当てに綿や布を丸めて使うことで、「月経コントロール」を可能にしていた。例えば、職業柄、着物を着て動かなくてはならない芸妓が、和紙と綿を使って膣に栓をする「生ずき」と呼ばれる生理用品を使用していたことを挙げている。「生ずき」はタンポンと異なり落ちやすくできているが、芸妓ならではの体の動きがその落ちやすさを防いでいたのではないかと三砂は言う。そして、「生ずき」は月経をトイレで排泄する際に、同時に排出していたとの証言もあると述べている。こうして「月経コントロール」ができるのは、日本の「昔の女性」の所作であるすり足や正座で、性器を中心とした下半身の筋肉が鍛えられていたからだと三砂は主張するのである。

このように三砂の主張は、2004 年に出版された、月経コントロールについての聞き取りや対談を掲載した『昔の女性はできていた――忘れられている女性の身体に“在る”力』（三砂 2004）でも繰り返し展開されている。この著作では、布や綿で処理できる月経コントロールを身に着けるために、着物を着ることが推奨されている。また、日本舞踊といった伝統芸能も、月経コントロールをするのに適していると論じられている。

5. まとめ――布ナプキンと月経の「再聖化」

ここまで、「スピリチュアル市場」において広まった布ナプキンの概要と、それが推奨されてきた理由について検討してきた。そこでわかったのは、次のとおりである。

布ナプキンの特徴として強調されているのが、

その質感である。布ナプキンは布でできているため、紙製のナプキンとくらべて温かみがあるとか、肌触りが良いとかいったことが強調されている。ただし、布ナプキンは紙製のナプキンと異なり、洗濯という手間が必要だが、経血の付着した布ナプキンを洗うことで、月経の状態を確かめ、母親になる準備として月経を位置づけていることが主張されている。さらに、布ナプキンを手作りすることも推奨されているのである。

布ナプキンの「効果」として強調されるのが、「冷え」をとることである。「冷え」とは東洋医学を背景とした考えで、書籍では「冷え」によって子宮が凝り固まると主張されている。布ナプキンは、子宮を「温め」ることで、子宮が凝りから解放されるという効果が期待されいる。さらには、オーガニックの綿を使うことで、子宮が健全な状態になるという主張もなされている。また、漢方に基づく食事や、生活習慣の見直しが推奨されている。

そして、布ナプキンによって子宮が「しなやか」になると、「月経コントロール」が可能になるとする言説も散見される。「月経コントロール」とは、トイレで経血を排出できる力のことで、「昔の女性」はそれができていたとする主張がなされている。

このような、布ナプキンの人気に大きな影響を与えたのが、三砂ちづるの著作である。三砂は、「昔の女性」を称揚し、彼女たちには「月経コントロール」が可能であったと主張する。さらに、「原身体経験」とも言うべきお産の体験を、女性に取り戻すことの重要性を指摘する。なぜなら、そうした経験は女性の体を宇宙とつなげるものであり、女性が女性らしく生きるために重要だからである。他方で、三砂は女性の身体から「原身体経験」を奪ったものとして、フェミニズムを批判する。

こうして、「スピリチュアル市場」における布ナプキンの広がりからは、女性が自身の身体性や、特に月経と向きあう意識のありようが、現実生活の制約のなかで、神聖な意味を与えられるようになったことがうかがわれる。

冒頭でも述べたように、月経は女性に多かれ少なかれ影響を与える生理現象である。生理用品が発達し便利になったとはいえ、女性が月経から自由になることはできない。それを逆手にとるかのように、あえて手間のかかる布ナプキンによって、月経と向き合うことや、月経に価値や意味を見出すことが重視されている。具体的には、女性が自然とつながっているというイメージや、「母親」になるための準備として重視されている。また、子宮を温めるために「冷え」を防ぐことが強調されるのも、そのことで自身の女性としての美を維持したり、子どもを産むために準備したりといった「女性らしさ」が獲得されるだけでなく、月経を司り、さらには妊娠、出産へとつながる「子宮」そのものに、神聖な意味が与えられているからである。

布ナプキンの広まりには、専門家による「昔の女性」の再発見と、その称揚とが確かに影響している。「昔の女性」は、自分の体の声を聞き、月経や出産、セックスによって「宇宙」や「自然」とのつながりを感じる霊的な身体体験を獲得していたとされている。その現われが、布や綿で月経を処理し、コントロールできる身体のありようなのである。そうした「昔の女性」とは対照的に、現代の女性からはそうした身体性が失われているから、それを回復する手立てが必要だというわけである。その入り口として、布ナプキンに注目が集まったものと考えられる。

したがって布ナプキンとは、現代の女性の身体性を、神聖性を身に着けた「昔の女性」に近づけるためのモノとして、「スピリチュアル市場」で広まったと言って良いだろう。したがって冒頭で述べたように、紙ナプキンが月経の「世俗化」を意味するモノだとすれば、布ナプキンとは身体の「再聖化」を促進するためのモノと考えられる。そして、布ナプキンによって女性としての自身の身体性を「再聖化」することで、妊娠、出産を経

て母親になるという価値観が無条件に肯定されているのである。ただし、それは女性にとって、「母性」を自明のものとする保守的な身体観と密接かつ不可分であることが見落とされてはならないだろう。「昔の女性」の称揚において、フェミニズムへの批判がなされるのはそのためである。

布ナプキンのこうしたありようは、現代日本社会において「女性らしさ」の価値や、母親になり得る身体の価値が揺らいでいることの反映でもある。現代女性にとって妊娠、出産は難しく、かつ厳しい選択肢である。妊娠、出産には年齢という壁があるなかで、いつ、どのタイミングで産むかは、まったく先行きが明らかではない。さらに、この社会において子どもを産んで母親となることが、果たして「正解」なのかという根本的な問題がある。

だが、布ナプキンを使うことで月経をケアして、母親になる準備をすること、さらには自身の女性としての身体に神聖な意味を与え続けていれば、母親になることへの意味を肯定し続けることができる。なぜなら布ナプキンや、布ナプキンをきっかけとする自身の生活の見直しは、女性としての身体性に神聖性を与えてくれるものである。その上で、「母性」を育み、子ども産み、育てることを肯定してくれる。こうしたことから、女性の母親になることへの葛藤や、自身の女性としての身体性への不安が、「スピリチュアル市場」で神聖性と結びつけられた結果生まれたのが、布ナプキンだと言えるだろう。

しかし、布ナプキンからは、「女性らしさ」「産む身体」の肯定とひきかえに、社会に対するあきらめも垣間見える。布ナプキンに見られる女性の身体観の肯定は、女性の妊娠、出産をめぐる社会環境の整備や、改善、変革を声高に求めるものではない。せいぜい、地球の環境という漠然とした対象に、関心が向けられているにすぎない。さらに、パートナーたる男性の意識の変革も、ここでは求められていない。こうして布ナプキンが注目を集めるという状況からは、女性としての身体性を神聖化することで、その先にある現実の変化を期待しないという女性の意識そのものの限界性が浮かび上がってくるのである[12)]。

6. 終わりに

布ナプキンは今日でも、「スピリチュアル市場」で、引き続き安定した支持を受けている。これに加えて、子どもが生まれたあとに、布オムツを使用することが注目され始めているのが今日の状況である。一方で、「子宮」に神聖性を見出すメソッドや本が人気を集めるなど、「子宮系」と呼ばれるジャンルも話題を集めている。こうした動向をみると、これからも、女性の身体性を「再聖化」する動向は形を変えながらも、「スピリチュアル市場」において定常的に広まっていくだろう。

同時に、女性性を巡る「スピリチュアル市場」でやりとりされている情報や商品は、保守的な身体観や、女性観、「母性」を強化するように作用すると考えられる。その背景には、現代日本社会における女性の「産む身体」をめぐる抜き差しならない葛藤があると推測されるのである。

注

1) ただし布ナプキンの全てが、「スピリチュアル」な商品として売られているわけではない。また、購入する女性も、数多くある生理用品の一つとして使用している場合がほとんどである。

2) スピリチュアル、あるいはスピリチュアリティが何を意味するかについての内容については、島薗進による議論を参照されたい（島薗 1996）。

3) 詳しくは（Carrette and King 2005）を参照されたい。他方で筆者は、現代社会において宗教の「市場化」は宗教の世俗化の先にある、新しい事象として正面からとらえる必要があると考え、ピーター・バーガーの議論を手掛かりに論じている（橋迫 2019a）。

4) 経営コンサルタントの有元裕美子は、こうした「スピリチュアル」な商品が売り買いされている状況をネットのデータから調べて、「スピリチュアル

市場」と名づけている。

5）「スピリチュアル市場」ではほかにも、子宮に聖なるものとしての意味を与える「子宮系」と呼ばれるジャンルが人気を集めた。詳しくは（橋迫 2019b）を参照されたい。

6）リプロダクティブヘルス＆ライツについては、詳しくは（上野編 1996）を参照されたい。

7）「世俗化」についてはさまざまな議論がなされているが、例えば先述したバーガーによる議論のほかに、トーマス・ルックマンによる議論も参照されたい（Luckmann 1967 = 1976）。

8）布ナプキンメーカーが主催する、「布ナプキンフェスタ」も開催されている。布ナプキンフェスタでは布ナプキンの使い方や、子宮にまつわるスピリチュアルな内容の講演会を催しているほかに、ヨガの講習や布ナプキンを手作りするワークショップなどが開催されている。

9）ただし同じ高分子ポリマーでも、冷却用に使われるものと、紙製ナプキンに広く使われている吸水用の高分子ポリマーは異なるので、この主張の正当性は考えにくい。

10）紙製のナプキンから子宮に毒素が入り込むという主張は、紙製のナプキンと性器との接触範囲を想定すると、考えにくいのではないだろうか。この主張は、あくまで書籍のなかでの話であると理解される。なおネットでは、通気性の悪いタンポンを使用した女性たちが、黄色ブドウ球菌が排出する毒素に感染して死亡するトキシックショック症候群のエピソードと類似する内容が、紙製ナプキンによる毒素の事例として混同して紹介されている場合もある。タンポンによるトキシックショックについて詳しくは一般社団法人日本衛生材料工業連合会のサイトを参照されたい。（http://www.jhpia.or.jp/standard/tss/tss1.html：最終閲覧日 2019 年 12 月 5 日）

11）こうした三砂の主張に対して、フェミニズムのなかでも、ウーマンリブに立脚した観点からの批判も見られる。詳しくは（田中 2005）。

12）今回は日本の事例のみを取り上げたが、海外でも欧米を中心に月経を聖なるものと見なす動向が見てとれる。ただし、欧米では布ナプキンではなく、シリコン製の月経カップと呼ばれるものに経血を受けとめて、その経血を神聖視する傾向が見いだされる。また、月経カップが普及した背景には、欧米ではもともとタンポンの普及率の方が大きいためということが指摘される。

［参考文献］

天野正子・櫻井厚，1992，『「モノと女」の戦後史――身体性・家庭性・社会性を軸に』有信堂.

有元裕美子 2011『スピリチュアル市場の研究―データで読む急拡大マーケットの真実』Peter Berger., 1967, *The Sacred Canopy Elements of a Sociological Theory of Religion*, New York: Doubleday & Company Inc.（= 1979, 薗田稔訳,『聖なる天蓋』新曜社.）東洋経済新報社.

Carrette, Jeremy and King, Richard, 2005, *Selling Spirituality: The Silent Over of Religion*, Oxfordshire: Routledge.

橋迫瑞穂，2019a，『占いをまとう少女たち――雑誌マイバースデイとスピリチュアリティ』青弓社.

――――，2019b，「『子宮系』とそのゆくえ――現代日本社会における女性のスピリチュアリティ」立教大学大学院社会学研究科『応用社会学研究』第 61 号pp.147-160.

Illich, Ivan, 1981, *Shadow Work*, London: Marion Boyars.（= 1990，玉野井芳郎・栗原彬訳『シャドウ・ワーク』岩波書店）.

井上清子，2,016，『おひさま子宮のまほう――体の中心から免疫力を高め、女性の不調を癒す』ワニブックス.

角張光子，2005，『ひろがれひろがれエコ♡ナプキン』地湧社.

仁平美香，2012，『ブルーデーがハッピーに変わる！魔法のヨガ＆布ナプキン』マガジンハウス.

クレヨンハウス編，2016，『いいね㉕いいこといっぱい布ナプキン』クレヨンハウス.

Luckmann, Thomas, 1967, *The Invisible Religion: The Problem of Religion in Modern Society*, New York:The Macmillan Company.（= 1976，赤池憲昭訳『見えない宗教―現代宗教社会学入門』ヨルダン社.）

川村邦光，1994，『オトメの身体――女の近代とセクシュアリティ』紀伊國屋書店.

三砂ちづる，2004，『オニババ化する女たち――女性の身体性を取り戻す』光文社.

――――――，2008，『昔の女性はできていた――忘れられている身体に“在る”力』宝島社.
波平恵美子，1984，『ケガレの構造』青土社.
小野清美，2000，『アンネナプキンの社会史』宝島社.
田中ひかる，2013，『生理用品の社会史――タブーから一大ビジネスへ』ミネルヴァ書房.
田中美津，2005，『かけがえのない、大したことのない私』インパクト出版会.
島薗進，2007，『スピリチュアリティの興隆――新霊性運動文化とその周辺』岩波書店.
瀬川清子，1980，『女の民俗誌――そのけがれと神秘』東京書籍.
山浦麻子，2012，『布ナプキンはじめてBook――生理をここちよく』泉書房.